



副園長日記

R3.6.22

ある日の夕方、子どもたちが帰って、静かになった園庭で先生たちの声が聞こえます。見ると、テラスに座り込んで何やら一生懸命しています。何をしているのかなと見てみると、一人の先生が嬉々として事務室にもどってきました。

「副園長先生、見てください。ほら、ピッカピカ。」

そうです。先生たちは一生懸命泥団子を作っていたのです。報告してくれた先生の目も、泥団子に負けないくらいきらきらと輝いていました。

先生たちは、子どもたちが降園した後、「次はどんな遊びをしかけようか。」「どんな材料使おうか。」とよく話し合っています。この日は、泥団子をぜひ子どもたちに作らせたくて、どうしたら子どもたちが興味を持ってくれるのか、みんなで相談をしていたのです。土の配合具合や水加減、泥のこね方、そして団子の磨き方などを、手も服も泥だらけにして研究していました。子どもたちにやらせた



いから試していると言いつつ、やっている先生たちもすごく楽しそうです。少しずつ光り始める泥団子をお互いに見せ合ったり、うまくできない時には「やってみて。」と交換し合ったりしています。ぴかぴかに光らせた泥団子は、保育室にそっと飾り、「だれが最初にみつめてくれるかな。」とわくわくしていました。

幼児期には子ども自身が自発的・能動的に環境と関わりながら生活に必要な能力を身につけていくことが重要と言えます。つまり、大人が子どものためになると考えて無理矢理進めても、それに子どもが好奇心や感動を感じなければ力は伸びていきません。しかし、子どものやりたいことだけでは、子どもの世界は広がりません。ある程度の刺激も必要です。活動の展開によって柔軟に対応し、子どもたちが自然とやりたいと思うような遊びを仕掛けて、子どもの発達を促していくこと、それが私たち附属幼稚園のねらいとする保育です。

子どもの心の動きを受け止めて、認めたり励ましたりすることが出来る保育者でありたいと思います。

ちなみに、せっかくぴかぴかに磨いた泥団子は、翌朝ひび割れてしまっていました。残念。悔しいから今度こそはと、先生たちそれぞれが泥団子作りに再挑戦しています。私の泥団子もあと一息です。

